

宮城県産業教育審議会 第3回専門委員会 会議概要

日 時 令和3年12月21日（火）午後1時から午後3時
場 所 宮城県行政庁舎 10階 1001会議室
出席委員 宮原委員，粕川委員，竹田委員，佐藤洋委員，阿部委員，佐々木委員，
伊藤委員，都築委員，澤口委員，佐藤春委員 以上10名出席（敬称略）
県出席者 遠藤高校教育課長，佐藤副参事兼課長補佐，後藤総括課長補佐，
他関係職員（事務局）

1 開 会

2 開会あいさつ

- ・ 高校教育課長

3 報告（議長：宮原委員）

（1）審議会報告について

資料2に基づき，事務局より報告

[事務局より]

- 第2回産業教育審議会 会議概要について説明。
- 11月26日（金）第2回産業教育審議会を開催
- 専門委員会報告として，9月24日開催の第1回専門委員会，11月1日開催の第2回の専門委員会の内容について説明。
- 協議において事務局より2点提案。
- 1点目は，専門委員会で審議を行った，答申に向けた4つの論点について（1）社会の変化に対応した人材育成について，（2）地域や産業界と連携した産業教育について，（3）専門高校・職業教育の理解促進について，（4）今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方について提案。
- 審議会委員から，専門高校・職業教育の理解促進のところで，オープンキャンパスにおける高校での中学生及び保護者等の受入れの実態，開催頻度，またその評価について質問があった。
- 回答として，事務局よりオープンキャンパスは高校の理解を深める良い機会と捉えており，開催頻度についても，これまで年1回開催の学校が多かったものの，部活動体験等を含め，複数回開催する学校が増えていること，昨年，今年と新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から，思うように実施できない部分はあったものの，動画配信やホームページなど，各学校が様々な工夫により実施している点について説明。
- オープンキャンパスについては，大学や専門学校の状況も話をいただいた上で，参加した中学生や保護者の方々の評価について，データを取り，分析，改善しながら，次のオープンキャンパスに繋げることが大事であるというアドバイスをいただいた。

- オープンキャンパスについて、中学生も楽しかったなど評価は高いが、なかなか進路選択に繋がらないのが現実という意見もあった。
- 中学生はもちろん保護者についても、専門高校のことをよく知らない状況にある。普通高校であれば入学して、普通教科を学び、進学するというイメージで分かりやすいと思うが、専門高校の進路については分かりにくいと考えており、その辺りを明確に示すべきという意見があった。
- 関連して、専門高校も共通教科の指導がたくさんあり、2, 3年生で専門科目が増えてくるが、教育課程表だけを見るとどこも同じに見えるので、中学生にとって分かりやすく、選択しやすい工夫が必要など、分かりやすさという点についての意見があった。
- 専門学校に入学してくる場合、必ずしも工業高校を出たので製造、建築土木系、商業高校からビジネス系というわけではなく、医療系や福祉系など、進路を考えて変更したという生徒もいる。このような状況を考えると、基礎学力、基本的な職業能力など、基礎的・基本的な資質・能力の育成が必要になるという意見もあった。
- この「答申に向けた4つの論点」については、多くの意見や希望、要望等があったが、2回の専門委員会を経て、今回提案の4つの論点の抽出については、過不足なくうまくまとまっている印象を受けたという意見があり、「答申に向けた4つの論点」については、特に審議会委員からは異論はなかった。
- ただし、審議会委員の育ってきた時代のキャリアパスと現状は随分異なっており、社会が多様化すると、キャリアパスも多様化し見えにくくなっている。その中で、産業教育をどうしたらいいのかということが、様々な問題を生じさせている、そのようなことを答申の前段で触れなければならないという意見もいただいた。
- 2点目の提案事項(2)答申(素案)骨子(案)について、諮問の内容の確認を行った上で、協議の1つ目の4つの論点に基づき、構成した骨子(案)について提案。
- 答申の構成については、「第1章 本県産業教育を取り巻く現状と課題」、
「第2章 これからの本県産業教育の在り方」、
「第3章 各学科における学びの在り方」、
「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」の4つの章立てとした構成を事務局より提案。
- 協議1つ目に提案した抽出した4つの論点については、第2章及び第4章に反映させることも併せて説明。
- 委員からの主な意見。共通の学び、倫理観の醸成や基礎学力の重要性について意見があった。
- 教員の指導力の向上と併せて、様々な連携の取組や、6次産業化への対応を含め、先生方の負担に対する意見をいただく。通常の授業を行いながら、教員自身の資質・能力向上のための研修への参加や、連携のための企画立案、斡旋、実施など教員の負担が大きいことから、コーディネート機能を持つような専門職の位置付け、配置が必要であるという意見や、例として示されたのは農業に

おける就農について、東京証券取引所の人材育成塾のプログラムの活用などを参考として、民間企業のプログラムを活用することでの学校、教員の負担軽減の方策などの話もあった。

- また、連携においては本来の学びと連携の学びがかけ離れないように、本来学ぶべきものが何であるのか、学びを発展させるために連携があり、教科の学びの中に、連携をしっかりと位置付ける必要があるという意見をいただいた。
- 倍率の問題の意見もいただいた。倍率が低い、定員を満たしていないから、専門高校の学びを閉じていくことに対して、産業教育審議会として、答申に入れるべきではないかという意見があった。地域にバランスよく、専門教育をきちんと成り立たせていく、宮城県としての方向性を示していかないと、産業人材が先細っていく、倍率だけではないところの立ち位置、守らなければならないということについて答申の中で表現してほしい。
- また、関連して、今後の産業教育における専門学科構成について、登米総合産業高校など、産業人材を専門高校で養成していくという観点から、県全体の専門高校の在り方を考える必要があるのではないかと、拠点校方式でいくのであれば、順次ではなく、県全体やブロックごとの拠点校と、その拠点校の下での地域に特化した専門高校をつくっていくなど、大方針も必要ではないかなどの意見もあった。
- さらに、ICTについては、情報学科の設置の検討の必要性、学科を設置しないのであれば、各専門高校に情報の専門教員をきちんと配置し、ICTをきちんとできる人材の育成を行うことも重要ではないかという意見をいただいた。
- 人口が減少して少子化も進む中で、今のままの専門高校のままでいいということは、誰も考えておらず、どういう編成の仕方があるのか、地域経済との関りもあるが、絶えず議論しながら、必要に応じて取り組んでいかなければならないというご意見をいただいた。
- 答申（素案）骨子（案）については、構成等に対する異論はなかったが、答申作成にあたっては、審議会委員及び専門委員会委員の意見を反映させながら、答申（案）について、作成することとしている。

【専門委員会からの質問・意見は特になし】

4 協議

(1) 答申（素案）について

資料3, 資料4に基づき、事務局より説明

【事務局より】

- 第2回専門委員会で、審議会委員及び専門委員のご意見、質問紙調査の結果を踏まえ、4つの論点として抽出、整理した内容に基づき、第2回産業教育審議会において、資料3答申（素案）骨子案として、目次構成ベースにて、提案。
- まず、諮問の内容については、『今後の産業教育の在り方について』
 - 1 今後の少子化などの社会状況の変化に対応した専門教育の在り方について

2 予測困難な時代に求められる資質・能力を育成する専門学科構成ついての内容を念頭に答申の構成としては、

- 「はじめに」として、国や社会、県の動きについて、また、審議の論点及び経緯について記載。
- 章立てについては、4つの章で構成し、まず、「第1章 本県産業教育を取り巻く現状と課題」とし、「1 本県産業教育の現状」、「2 本県産業教育の課題」を、学科の設置状況や入試状況などデータに基づく内容を記載。
- 続いて、「第2章 これからの本県産業教育の在り方」として、この部分で抽出・整理した4つの論点うち、この第2章では、「1 社会の変化に対応した人材育成」、「2 地域や産業界等との連携」、「3 専門高校・職業教育の理解促進」の3つの論点を反映させる内容としている。この部分が諮問の1つ目に対応した内容となる。
- 続いて、「第3章 各学科における学びの在り方」として、第1章及び第2章を踏まえ、今後のそれぞれの学科での学びの在り方について、質問紙調査結果の分析及び考察を行い、今後、専門委員会及び事務局で原案を作成していきたいと考えている。
- 最後に、「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」として、抽出した4つの論点の4つ目ですが、「第3章 各学科における学びの在り方」において、今後の学びの方向性を示した上で、さらなる少子化などの影響により、これから産業教育の在り方を考える際に、必要となってくることが予想される専門学科の構成等について、中長期的視点に立った検討も必要と考えた。こちらは諮問の2つ目に対応した内容となる。
- 「おわりに」、今後の望ましい産業教育とし、答申（素案）骨子案を第2回産業教育審議会で提案、了承を得た構成に基づいて、答申（素案）を事務局で作成。

資料4に基づく、事務局説明

- **資料3** 答申（素案）骨子案に基づく、答申（素案）について説明。
- 「はじめに」、国や社会、県の動き、また、これまでの産業教育審議会における審議経過等について、まとめを記載。
- 続いて、「第1章 産業教育を取り巻く現状と課題」について、学科の設置状況、進路状況、入試状況などデータに基づく内容を記載。
- （4）産業社会の変化、「2 本県産業教育の課題」として（1）社会の動向や産業構造の変化への対応、（2）少子化による生徒数減少への対応について、一般的な内容に加え、県、教育企画室からのデータに基づき記載している。
- 続いて、「第2章 これからの本県産業教育の在り方」である。この第2章部分がこれまで審議会、専門委員会で皆様からいただいた意見により、4つの論点を抽出・整理、また、意見を反映させ部分となる。
- 「1 社会の変化に対応した人材育成」、（1）生徒の資質・能力の育成とし、①専門学科・専門高校で求められる基礎的・基本的な資質・能力の育成、社会の急激な変化に伴い、期待される資質・能力も変わってきているが、学びの基

- 盤となる基礎学力の定着，実践等を踏まえた基礎的・基本的な資質・能力の育成が必要であること，ふるさと宮城への愛着や誇り，課題解決能力，グローバル化への対応，コミュニケーション能力の育成について記載している。
- ②次代の産業を担う人材に必要とされる資質・能力の育成として，Society5.0社会への対応，ICT活用能力等，起業家精神の育成，SDGsの担い手の育成について記載。
 - (2) 教員の指導力向上では，生徒に必要とされる資質・能力の育成に対応するためには，教員自身がSociety5.0時代における職業人に必要な専門的知識や技術の習得，ICTを利活用した実践的指導力の向上について，また，それらスキルの向上を図ることができる機会の確保の必要性，また，様々な連携を行う上で必要なコーディネート力，ファシリテーション力，マネジメント力のスキル向上の必要性を記載している。一方で，教員の負担の懸念もあることから，コーディネート機能を持つ，専門人材の配置の必要性についても記載。
 - (3) では産業教育に必要な施設・設備の整備について，スマート社会に対応した教育課程の実現に向けた施設・設備の整備，今年度，国の補正予算において整備を進めている「スマート専門高校事業」によって，デジタル機器の整備が進み，新たな学びが可能となるなど記載。
 - 続いて，「2 地域や産業界等との連携」，(1) 産業界・高等教育機関等との連携，①産業界・高等教育機関等との連携では，地域の持続的な成長を支える職業人を担っていくために，これまでの連携の取組からのステップアップ，加えて，自分の学校だけではなく，産業界，高等教育機関の施設・設備等の活用などに関する連携について記載。
 - ②地域協働・地域活性化の推進では，地域課題解決等の探究的な取組，持続可能な社会や環境への貢献活動，地域の伝統文化・技能の継承に係る連携について記載。
 - ③学科間連携・学校間連携については，小中学校との連携，学科間連携，学校間連携について記載。
 - 「3 専門高校・職業教育の理解促進」では，(1) 時代のニーズを踏まえた教育課程の充実，①スクール・ミッション/ポリシー策定及び運用については，期待する各高校の存在意義や社会的役割など分かりやすく，学校の役割や理念を示すことが必要であることから，その内容を記載。
 - ②急激な社会の変化に対応できる教育課程編成「社会に開かれた教育課程」として，変化への対応について，「社会に開かれた教育課程」の実現のため，地域や，産業界，関係団体が参画した教育課程等の検討も連携の視点から重要ではないかということなどを記載。
 - ③スペシャリスト・ゼネラリストへの対応については，これまで，専門高校において，専門性に特化したスペシャリストの育成を目指してきたが，加えて，専門分野の枠を越えた幅広い知識・技術を身に付けたゼネラリストの育成についても記載。
 - 続いて(2) 魅力を伝える方策では，①専門教科の学びや職業に関する理解を

深める機会の創出と提供，②多様なツールを活用した情報発信やPR動画等の制作について

- (3) キャリア教育の一層の推進について記載。
- 「第3章 各学科における学びの在り方」，「2各学科の学び」について(1) 農業から(7)福祉まではまだまとめていない。後ほど，その他で改めて提案。
- 「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」については，「1 これからの産業教育における専門学科構成」として，(1) 職業教育拠点校(学科の連携と融合)として，登米総合産業，大河原，大崎東部ブロックを例とし，(2) 新たな産業の創出を視野に入れた学びを記載。
- 続いて，「2 長期的視点に立った学校の在り方」，(1) 地域づくりと産業教育，(2) 高校卒業後(18歳以降)の学びの場の検討(リカレント教育)としている。このリカレント教育については，もっとしっかりと整理した記載が必要だが，今回はこのような内容で記載。
- 「おわりに」として，今後の望ましい産業教育として，今後，まとめたいと考えている。加えて，資料編も掲載。
- 本日は，第2章，第4章を中心に，委員の皆様へ，ご意見，ご審議をお願いしたい。以上です。

[専門委員からの意見] (○委員，●座長)

- 答申(素案)を見たが，その時代時代の変化に対応した教育課程を編成しながら取り組んでいかなければならないということを非常に考えられる内容になっている。最近よく言われている「持続可能な」というキーワードを盛り込んだ中身となっており，私は農業が専門であるが，農業自体もこれからはそのような視点をしっかり持ちながら，子供たちに教えるということが必要だと感じている。先日，本校でもSDGsについて講演を行ったが一つのキーワードとしては重要だと感じている。
- どういった人材を社会に輩出するかということが，産業教育の中では非常に重要なポイントだと思っている。しかしながら，高校へ入学してくる生徒は非常に多様であり，基礎基本を身に付けている生徒だけではないため，多様な生徒にどのように対応していくか，個に対する指導という部分も重要なことだと考えている。ただし，高校は3年間という短いスパンで指導しなければならないことから，どのように指導していくかということについては，教員の指導力の向上ということが必要な部分ではないかと考える。
- 自分の学校だけで完結しない部分，そのようなところを上級学校であるとか，答申の素案にも記載があるが，専門大学校とか専門学校，また，民間の方の力を借りながら進めていかなければ，より充実した産業教育はできないと感じているが，そのような内容も含め，様々な視点が盛り込まれている答申内容であるという感想を持っている。
- 産業教育とあるが，子供たちが成長していく中で，やがて社会に出ていく，そのときによりよい生き方を選んでいくその過程になると思う。前回の起業家精

神の話などもあったが、最近考えているのは、工業高校だと大きな企業、ネームバリューのあるところに進むというのが、一般的な選択ではあるが、果たしてそれが幸せなのかどうかというのは、私たちの目から見て、必ずしも幸せとは言えないとは思っている。やはり県内でも、工業の中では、技術力がとても高く、付加価値の高い製品を製造している優良な企業も多く、そのようなところに目を向けさせていくという指導、キャリア教育も必要と感じている。

- それから、今、答申の素案のところを見ていたが、その9ページ(2)の魅力伝える方策のところだが、魅力の伝え方ということは、この会でも議論してきた部分ではあると思う。どちらかというところだと高校側での努力、我々側での努力の話ということが主であったが、子供たちが成長していく、そして職業を選択していくところまでを捉えたときに、高校の努力だけではなく、例えば義務教育段階でのキャリア教育、そのようなことも充実させていくことによって、産業教育、農業や商業、工業などを選択するという子供たちの選択肢になるのではないかと考えている。少しこの会の枠をはみ出してしまうかもしれないが、例えば義務教育課や産業人材対策課などとも、協力し宮城県の人材育成という観点から、キャリア教育に取り組む必要があると思った。9ページの(2)①の辺りにそのような内容が盛り込めればと考える。少し話を膨らませすぎるとも思うが、子供たちの成長を一貫して捉えると少し膨らませた方がいいと考える。
- 教員の資質能力、指導力向上というところが、ネックになると感じている。商業の置かれている状況が、県内だけではなく全国的にも大分縮小されてきている状況にあって、これまで商業というところでも簿記や情報処理ということで、座学が中心で、どちらかというところだと事務職に携わる人材を育てるような考え方が一般的であったと思っている。現在は事務職を求めるような時代ではないので、そのような観点から、教員の方の資質能力というよりは、意識の改革が必要なのではないかと考えている。どの業界においても、商業の入る余地があるので、そういう点から考えれば、商業の中身、内容を考えていく上で、教員がこれまでの事務的な学習よりは、どちらかというところだとコミュニケーション能力を高めるような内容を深く学べるようにすべきではないかと考えている。
- 気仙沼向洋高校には商業科はないが、水産科でも、工業科でも商業の教員が入る余地があって、そこで学びを深めるといえるところがあるので、できればそのようなところを、少し組み入れてもいいのではと考えている。
- 審議会の方でオープンキャンパスについて話題が出ているが、オープンキャンパスを行ってきているが、実情として保護者・生徒の参加は多いが、中学校の教員がほぼ来ていない。結局、最後に中学3年生が進路を選択する際に、中学校の教員の意見を、保護者の方が聞いたときに、どうしても教員の方が実業系の学校のことを理解してないというところがある。そのようなことで中学校訪問等をして、3学年担当の先生にいろいろと話すのが、それでも実業系の中身をしっかりと理解できていないところがあるので、中学校の教員の方がオープンキャンパスに参加できるような体制が整えられればと考える。実際、正直な

話を聞いたところ、出張扱いにならないので出ないというような回答をしている学校もあるので、そのようなことがないように、進めていけないかというように考える。

- 大学だと高校の先生方を招き、説明会をしたりする。オープンキャンパスとは別に教員向けの説明会などがあるが、高校はそのような場はあるのか。
- 中学の教員の方を招いて、教員だけの説明会をするということは行っていない。逆に中学校側からの要請により中学校へ出向いて説明をすることはある。
- 大学だとほとんどの大学は高校の先生を招いて、その高校の卒業生にこんな学びをしていますという体験談を話してもらうなど、様々な学習成果を見せながら、先生方に理解していただくという機会をなるべくつくるようにしている。それも方法次第だと思うが、オープンキャンパスの件は、中学校の教員の方に対する機会というのが、一つの課題である。
- 先ほど来、話が出ているが中学校の先生方だが、保護者の方は、昔からのイメージを持っている場合もあるが、中学校の先生方も転勤もあるので、実情を知っている先生が転勤してしまうと、知らない先生が来るので、なかなか継続的に、中学校の方で、中学生の生徒に対して情報提供などが、うまくいっていないのではと感じているところである。継続性があるともう少しいいのではないかと感じている。
- 魅力を伝えるところだが、本校では以前、中学校の先生を招いて中学生に体験してもらう内容の企画をしたところ3人ぐらいしか参加がなく、その後、尻切れになってしまったところがあるで、とにかく、中学校の先生にいろいろ知ってもらう努力をすることは必要だが、こちらから最初にアクションを起こさない限りは、恐らくは進まないのではないかと思うので、そのような内容もどこかに入れていただければと思う。
- 答申の素案8ページの「3 専門高校・職業教育の理解促進」の(1)の③スペシャリスト、ゼネラリストへの対応だが、スペシャリストの育成というのは、今までも行ってきているが、ゼネラリストとなると、なかなか基礎学力が足りない生徒がだんだん増えているし、特別支援的なことが必要な生徒、それから通級の方もやるようにということで、文科省からも通達が出ているので、その辺りのバランスをとるのが、非常に難しいと感じている。その辺り、どちらを指導すべきかという点など、何か具体的な内容の表現を入れてもらえるといいと感じている。
- ゼネラリストとは、どんなイメージというのが少し見えない。言葉として対になっているが、対になるのは大変かもしれない。イメージとしてスペシャリストが根幹にあって、そこに他の分野にも興味があり、少し知識を持っているところとは思いますが、全く違う存在としてのゼネラリストのイメージだと少し厳しいところもあると思うがいかがか。
- 高校レベルの知識で、企業の方に行って、何か仕事を急に任されるということは多分ないと思うので、どこの部署に配属されても周りの人たちと上手くコミュニケーションをとりながら仕事を進めていけるというイメージかなと私は個

人的には思っている。

- それはすごく大事である。ゼネラリストという言葉はどうしていくかというのは、もう1回検討していくことが必要。大事な指摘をいただいたと思う。
- 産業教育の在り方というのを全体で考えた時に、どんな時代でも変わらない、ずっと大切に守って継続している部分があると思う。そこに今の急激な社会の変化で、取り入れるべきことが、しっかりと網羅されている内容であると感じている。
- 家庭科について考えたときに、私が一番感じているのは教員の意識改革というところで、家庭科はとても生活に密着しているところがあり、コミュニケーションや、日頃の身近な繋がりを大切にして、様々取り組んでおり、皆さん取り組んではいるが、ただ、その中で前にも話したと思うが、学校内に留まっているところが多く、外部への魅力発信の方法や、他との連携など、他の学科と比較すると少し弱いところがある。考え方を変えれば企業でも行政でも、他学科とも、いくらでも連携できるような幅広く魅力のある学科でもあると感じているので、先ほども話があったが、部局の産人課など行政の中の連携や、教員の負担を考えたコーディネートのことにも触れられていたのはすごく良いと感じている。
- それから先生方の話を伺って、義務教育との関わり方について、生徒にいろいろ発信する発想はあったが、話を伺っていて、中学校の先生はオープンキャンパスには確かに参加していないし、私は家庭科で今は商業高校に勤務、商業の魅力中学校の先生に伝える機会はない。やはり中学生と保護者は悩んで最後に相談するところは中学校の先生になるので、そのような点から義務教育を巻き込むというところは、少し触れると良いと感じた。
- 看護科の5年間一貫は、看護の中でいうと最短で20歳で世の中に出て、一番長いと大学22歳の方と一緒に職業人として1年目を迎えるというところで、この5年間の指導の中で意識していきたいと思うところと、また、いろいろな力を大学などとの連携で力を借りたいと思うところは、職業観などなかなかこの短い間の中で、中学校のところで決めては来るけれども、やはりその育み方というところで、まだ不足があるというようには、先生方の話なども伺って、もっとできることがあるのではと考えていたところでした。また、1年目を迎えてすぐに退職してしまう、1年以内で退職していたなど、そのようなことを噂で聞くこともあるのだが、そのような意味ではコミュニケーション能力などもすごく重要なところで、もちろん高校に入ってくる前のところでも、人との関わりについて、少なくとも抵抗がない生徒というところを学校でも提示しているが、それでも潰れてしまうこともあるので、学校の中でもそのようなところは、もっと力を入れていく必要もあるし、1年目で潰れないような学校でのフォローというところ、卒後のフォローというところも、なかなかそこまで手が回らないという現実はあるが、そのようなことも考えていけるといいと今、先生方のお話を聞いて、いろいろと案は浮かんでは来るが、なかなかそこまで手が回らず、いろいろなことを求められて、教員の中にいろいろな力を求められ

ている中で、やはり難しさもあり、先ほどコーディネーターの方がいてくれればというようなところ、情報のことなどは、本当によくわからない、使いこなせていないところもあり、そういう部分を手厚く手助けしてくださる方がいたらすごくいいと思ったりしている。看護は特殊なので、少し難しいがこのように感じている。

- 看護の場合、職業観を育むというのは専門教育の場面でそれを意識されるのか、それ以外の高校生としての教育の部分で、そこに触れていくのかということのはどちらの方が強いのか。職業観というか看護のこれから社会に出て、看護職を目指していくという時に、覚悟ではないが、思いをきちん持つという、そういう教育の部分は、看護の高校の場合は、専門に入ってからそれがより明確に打ち出されるのか、それとも最初に入ったときからそういうメッセージを伝え続けているのか。
- そこがすごく難しいと思うのは、最初からすごく責任ある仕事だとなってくると、本当にアレルギーになったりする子も、もちろんいるというのがあり、少しずつ教科の中で、専門科目が高校1年生から入ってくるので、そういった中では、本当に挨拶から一般的なところまで、そして、注射を間違ったら大変だというようなところまで、少しずつ指導するのが、すごく難しいと思っている。専攻科に入ったときにも、高校の3年間でやってきた中であっても、専攻科に入った時に、いきなりアレルギーを起こしてしまう。それまでやってきているのに、専攻科に行ったときに、高い壁を感じてしまい、この5年間の指導については、少し全国的にも問題になっており、専攻科に入ると本当に厳しくなる。また、教員側も高いところを求めてしまう。そして、生徒はすごく引いてしまうというようなところで、その境目も難しいとは思っている。
- 皆さん、看護師になりたい、看護職に就きたいと思っていてもそのような状況にあるということですね。
- 皆さんと意見は同じなのだが、まず中学生への理解をしていただくという点で、例えば難しいことかもしれないですけど、審議会の方に中学校の代表の校長先生方や現場の先生方などが、この産業教育審議会等に参加されたりするだけでも、何か少し違うのではないかという点は少し考えた。
- 自分のことだが、娘が中学生で、やはり様々な産業の人が外部講師として講話に来ていただくというようなことが少ない気がして、いつも学校のアンケートには書くのだが、私たちもそうですが、中学校の先生方が本来、先生の業務として果たしてどこまで進路指導で、携わっていくかということは、多分想像していないのと同時に、私も普通高校を出て、教員になったが、中学校の先生方も普通高校を出て、産業について触れないまま教員をしていると思うので、どうにかして恣意的に、周りの方から理解をしてもらおう仕掛けをするのがいいと思った。
- ICTを利活用する力を養うという点が非常に重要だと思う。私たちが今、教えている生徒たちが社会に出て、2年後3年後には、あっという間に利活用できなくてはならないような現場に立たされていると思うので、そういうことを

考えると、そこを教員が前もって学び、目の前の生徒に教えるというまでの時間と余裕、能力が追いつかないので、コーディネーターの方に、今すぐにでも来てもらいたいという状況である。ICT関係とかスマート専門高校も、本校も応募し、少し機器を導入するが、導入会社や現場の施設の方から聞くと、どういった場面でその機器を導入するか、導入することで全体の業務のどの部分が軽減されるか、そのデジタル機器を入れる前の業務の課題や、整理ができていないと、例えば眠りスキャンという各利用者のベッドのところに離床センサーみたいなものを設置すると、夜間の巡回を減らすことができるが、減った分、その介護士は何しているか。漫画読んでいるという状態では、それは漫画を読むために入れた機械ではないため、そういったことをきちんと整理整頓してからでないとそのデジタルトランスフォーメーションの意味がない、そういうことも踏まえたICTの利活用ということを考えると、まだまだ教員の指導力は間に合っていないので、どうにかしなくてはいけないなどは感じている。

- 今日のお話を伺って、また資料も拝見し、中小企業家同友会を代表という立場でここに座っているが、そういう立場で発言をさせていただくと、非常に資料もすごく丁寧にまとまっているという印象を受けた。この資料に出てくる地域づくりとか、まちづくり、地域の活性化への取り組みなど、そういったキーワードがたくさん出てくるが、そういう視点で考えたときに、高校生が地元就職していく。地元の企業に入社をして、この宮城県で生活の基盤をつくっていくということが、結果的にはこの地域づくり、このまちづくり、持続可能な社会というところに繋がっていくのではないかと感じている。そのような意味では、地元の中小企業と高校の先生方、生徒、保護者の方が接点を増やしていく必要があるのではないかと感じている。宮城県中小企業家同友会も今、会員数が1030社ぐらいなのだが、その中で新卒採用を継続的に毎年行っている会員も、今年度の充足率というのが大体57%ぐらいである。よって、まだまだ採用活動を継続している企業もたくさんあり、採用活動はしているが、まだ内定者ゼロという企業も現時点でもあるという実情がある。そういう意味では、マッチングの場というものが非常に足りていないと感じるし、そのような機会がもう少しあるだけでも、充足率や、そのような情報を知っているか知らないかだけでも全然違うのではないかと思う。当会の会員企業は、本当に3月ギリギリぐらいまで実際、募集をしている企業もたくさんあるし、年内で終わってしまっているとか、夏で終わってしまっているとか、そういうように思われている学校の先生方も、恐らくいると思うが、実際、なかなか採用活動に苦労している企業もあって、ずっと1年通して活動しているという企業も結構あるので、そのような意味では、双方で情報交換をして、若者が自分たちの地元にしっかりと拠点を構えて、そこで生活の基盤をつくっていく、その土台となる部分をしっかりと仕組みとしてつくっていければいいと思っている。そのような意味では、地元企業との連携など、私の立場からするともう少し増やしていきたいと感じた。
- 先生方にも地元中小企業がどのような取り組みをしていて、どのような付加価値

値を世の中に発信して、提供しているのかということ、今まで以上に知ってもらいたいと思うし、それを生徒にたくさん伝えてほしいと感じた。

- この場というものが何なのか改めて考えさせられたのだが、白石市役所の前に標語が一つ掲げられていて、「大人が変われば子供も変わる」という標語だが、まさに、大人が変われば子供も変わるというのはこの場の皆さんで考えていることもそこなのかということ、改めて感じて、そうしたときに教職員の指導力向上と地域との連携、この二つは本当にしっかりと大人の方で考えていかないと、子供たちに地域との連携ということを考えさせることは厳しいと思うので、その辺りを一緒になって考える場というのが必要ではないか。そうした時に、高校サイドとして必要なことは、皆さんの話には出てこなかったが、3の(1)のスクールミッション・ポリシー策定及び運用が私は一番大事だと思っており、どれだけいいことをしていても、伝わらなければ知らないと一緒に思う。そうした時に、これから人口減少が進み子供も少なくなっていく中で、高校に進学する子たちに選んでもらうためには、しっかりと発信しないと伝わらないと思う。たくさん的高校がある中で、なぜこの高校を選ぶのかという時に、企業という企業理念と同じだと思うが、そうしたスクール・ミッションは、皆さんの高校でも確実にあると思うが、もっと人に伝わるような、他校との比較、差別化が図れるようなミッション、理念というものをしっかりと磨き上げるということは、実は根本の作業としては凄く大事なのではないかと。ミッションが磨き上げられた後に、2番目の魅力の伝える方策。ミッションがしっかりできていないのに、情報発信しても何も伝わらないので、そのミッションができ上がって、それをどのように誰に伝えるか、ミッションに対して、教職員、生徒がその理念に沿った行動をしているかも一緒に伝えることによって、そのミッションの価値がどんどん上がって、この魅力的な高校に娘、息子を入れたいとか、入りたいということに繋がっていくと思っている。改めてこのミッション、理念という目に見えないものは非常に難しいところはあるが、正直、企業の中でもない企業も多いとは思いますが、100年続いている企業とかを見ると理念というのをもっている企業が非常に多いと思うし、そういうものを今までとは違う我が校にあったミッションというものにしっかりと掲げて、それを発信するということは、今後大事ではないかと私は思っている。
- それから、スペシャリストとゼネラリストの言葉の定義についての話が出ていたが、私自身スペシャリストは専門課程、その分野でプロという定義をしている。ゼネラリストは、多方面に対して中より上ぐらいでいろいろなことを足したように学んでいる人で、マネジメントができる人を私はゼネラリストだと考えている。もちろん、スペシャリストも必要だし、ゼネラリストも必要である。車でいうハンドルとエンジンのようなもので、その二つをしっかりと回すことによってギアが噛み合って、会社、組織、高校などが良くなっていくと思うので、そこを育てていくというのは非常に大事なことだと思っている。
- 当大学でも、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーといいまして、入るときにアドミッションポリシーで、本学ではこうい

った方針なので、こういった学生に来てほしいという入学のところのポリシー、ディプロマポリシーでは、こういう学生を輩出しますという目標、ディプロマポリシーの目標をクリアするために、こういうカリキュラム体制で行きますというカリキュラムポリシーがある。今、三つのポリシーをどこの大学でも整備を求められており、今の話にあった理念という部分もものすごく大事で、どうも受験生は、指導する先生から、受験する先の大学のアドミッションポリシーをしっかりと読みなさいとまず指導されるようだ。よって、学校の方針であるとか、カラーが出てくるところという意味付けで受験生に伝えているようなので、私たちも何回か修正しながら、全学で議論しながら、そして全学だけではなく、各学部・学科すべてに3つのポリシーがあるので、それぞれの学科のすべてが出てくるようになっていく。そこまで細かくしなくても、学校のその理念というのを、これから受験される方や保護者の皆さんにどう伝えていけるかと、それが社会的なミッションとどう繋がるかということがすごく大事だと思う。

- 今回のこの素案は、専門委員会の方の意見も、それから審議会の委員の皆さんからのご意見も、非常によく整理されてまとめられていると思う。一方で、受験生があまり伸びてこないその部分として、もう少し根本的な産業系の高校が、進学先として誇りを持てるというか、自分はそういうところに入って、学んでいる高校生であるということに対して、もっと誇りが持てるような状況をどうやってつくっていくか。どうしても普通高校から、表現的に難しいですが、落ちたから産業系高校だとか、それから、学力的に産業系のようなそのような位置付けで、何となくそういうヒエラルキーがあるような気がして、そこをどうやって払拭していくか、ないしは違うイメージでアプローチができるかというのは、社会が変わる中で、このヒエラルキーを変えられないというのもおかしいと思う。高校の当事者の教員の皆さんも、県の皆さんも産業教育が大事だということは重々わかっているけれども、今のこの社会の中で、そういうある種の順番みたいなのが存在するところを、一丸となってイメージをしっかりと変えていく、変わっていく社会に貢献できる人材を育てる。そういう産業教育の場がとても重要だということを、トップからみんなから言っていないと、いろいろやることはあるが、入学生が増えないところになってしまう、そういった印象がある。その辺りの産業教育の高校のイメージというのを、軽いイメージではなく、社会にどう役立っているかという部分をしっかりと伝える仕組みが必要ではないかと思う。そして、それが先ほど来、多くの先生方が言っている中学校、義務教育との繋がりのところで上手に伝わっていき、そして、中学生でも志の高い子たち、社会で自分も活躍したい、それから、社会のために何かをしたいという子供たちが、そういう流れで産業教育を選んでくれるという、そういった流れをつくっていく、そこは先生方だけではなく、産業界の皆さん、いろいろなセクターの方たちが一緒になって理解を進めていくということが大事ではないかと思う。具体的には、今、私の現代ビジネス学科の方に商業科出身の学生や、柴田農林出身の学生もいるが、他の学生に比べて、元気で、そしていろいろなスキルを持っているので、大学入って

きて、自分がやってきたことが、他の子ができていないということを目の当たりにして、俄然元気が出てくるというか、他の違う世界に入ってみると、自分がやってきたことや、教育してもらったことがものすごく宝物だということに気づく。それは素晴らしいと思うし、先生方がしっかりと教育されてきた賜物だという部分はあるので、そのように違う世界に出たときに、「ああよかった」と思ってくれるようなそういった教育になっているし、それが進められたらいいと思った。

- それから、デジタル化については、とにかく学生の方が二歩も三歩も上に行っていて、動画を作るといってとすぐ作ってくれるし、とにかくびっくりするぐらい彼らにはもうデジタル化が進んでいる。ですからどのようなシチュエーションで、デジタルを使うと有利になるか、有効なのかということも、使いながら、また、教育だけではなくて普段の暮らしの中と、学ぶというところが、今、デジタルと不可分になってるところもあるので、その辺りを踏まえた上で様々な機器の導入であるとか、チャンスの導入というか、そういうことも必要ではないかと思った。

- それでは、事務局より提案のあった答申（素案）について、専門委員会として審議会へ繋いでいくということによろしいか。

【異議なし】

※ ただし、本日の委員の意見を踏まえ、追加、修正等を行い、審議会へ提案

(3) その他

[事務局より]

- 第3章の部分だが、各学科個別の学びのあり方について、実はまだ学習指導要領上の各教科の改善点の工夫の部分だけを載せており、それぞれの視点のところが、空欄になっている状況にある。この部分に関しては、各学科における生徒の資質能力の育成、関係機関との連携、各教科の魅力について、第2章の内容を踏まえた上で、作成していきたいと考える。これまでのように、自分の学科・教科に特化した内容でまとめるのではなく、産業教育全体を考えながら、簡潔にまとめていきたいと思っている。
- 各学科代表の委員の皆様には、その部分作成のご協力を今後お願いしたいというところである。今後、担当指導主事と協力しながら、作成していきたいと考えているので、御協力をお願いしたい。

5 その他

6 閉会